

1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2

70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

色薩翁秘傳本立五條

中村俊定文庫  
文庫 18  
1006  
3

芭蕉翁秘傳二十一條





御宿の道

式ノ間日御宿を行ひるよとす  
着の宿宿を往くと又日御宿のと  
あるの宿の御宿をまほに宿をへば  
あらてその宿の宿を過ぐるに宿をわ  
かかとておもむきをまよひて道をすと理ひれ  
とも御宿の宿を向きおおむかえてゆきの下  
のつたすと

足傳一面字の事ある

春秋四百種類は極ま別よアラル再アリ

聖の世に必キリン出でて其傳全體にあら

渴せの時も必ずキリン出でて其傳の小舟アリ

### 御傳の事

御傳の事は古事記等をもとと説  
べ非の意と云ふ事は御傳の清松門で御の室へ  
定められても空手腰佩と利口也御傳の事

集御傳の事と曰ふ事おいた事  
又傳ゆる事通じ因ゆきも見えがいも  
おも御傳と御傳の事ねうされもあひま  
御傳ゆく事と看御傳の事御傳の事  
おも御傳の事と御傳の事御傳の事  
とよモテ理を立て高き事と曰ふ御傳の  
事も御傳の事と御傳の事御傳の事

義理を虚す事で宣ふ爲へ宣ふて虚す事  
へりて宣へと爲ふ事へ人ひへるが故に聖は  
れの事とせり又月のけたまこと爲ひも實に將  
記の事と虚す事へ御清の宣は相詩被連れて  
トアズ物は止むた唐を生むる唐の事もあれば  
文章より下す唐をと世初年もと宣  
三事と云ふに義禮智と忠信と廉也より  
は祐りて或は後きの事一ノ事へりたま

### 家の傳授によれ

#### 變化の事

文書より下すハ書の事と書は虚実の自  
身をつゝ黒日紫角とて色のけやうて黒を  
足としとす黒と白一とも皆くて色の変  
化と云ふ事理ハ黒を下す色と白の色化  
と云ふ事とすれども即ち色と本性之  
況仰清と云ふ事とすれども天地の氣と水火  
とすれども其の事は下すい月の内性之

まゝあれはでかいいてよと書いたまへりこちま  
仕合ひて。妻はいそぐのとひまわい圓あらうと  
くまゆるて前後の妻はともうとれどそれい妻  
仕合ひまは妻がまわす。人をまよわせたま  
きをうむ。一とさよ。まほの妻がまくしてまの妻に  
うおる。妻にち緊料理の其くはくびく  
辛うむ。被もまくへん需も思へぬ  
みよ妻はと虚室の日をよしと却く

起義 轉合の事

御禮をよ下す金をて歌て云々「歌」  
虚室奥うすゆて之を細の因ノ念細まへそまひ  
ゆき之一物歌ふ時ハお叶てよ生れ是沙羅と  
ソニ物ノ物と宣ふて室の字ハ竹上の  
根を沙翁の口にすれども多うと陽  
あらへてくと云ひ。初くとも志つて風を出  
あらへて。金はる物不許す。歌とは  
ほのまの沙翁。一とさよ。妻はて山有

此處の風物は云々

名物切字をす

名物の如きは別の物とされども  
まことに其の如きは家とある  
の事例なり譬如はゆき等の如き  
名物は云々

相手よりつまむり候る

此處に於てゆきとゆるハ御より  
詮あらば其の如きの物を云ひし

服の韵字を

服の如きと韵字を云ふ事より之の如き  
名物を云ふ所也

（之の如き）やもひよ

それで隊の首は云々

（之の如き）初て御者（のそとく）の御者（のそ  
とく）と云ふ事より之の如きの如きの如  
て隊の首を云ふ事也云ふ事にて隊の首を  
（之の如き）の如きに於ける事也

まどかの年すらりと御船よまた  
船の身のう  
おまつは船の身のうあひぬほどのうす  
旅の事の仕方れいおはねのうとお  
ておみづはうめたる山川もほのてよテ字  
の風情をそぞる家の風情をそぞる  
様のてよテ字の風情をそぞる

音 こゑよなのう

オこの身にえよの字のうるうらのうのうま  
ねまつゆうりとも下のうるうむかうて次のう

くまのうをもがくう理をもがくをも字を字を船  
しんと御くさりをもがくをも字を船をもがく  
やも字を字をもがくをもせよ字を字を船をも  
式の船をもがくをも押す船を船をも

ハ御くさ人の船を

坤もまた字を字を字を

ソウきのうとあるむじゆとありとうとせきと  
船をもがくをもがくをもせきとせきとせきと  
船をもがくをもがくをもせきとせきとせきと

オこの句をもがく

あれとみたのう

も本ウタニシニ

四句 四部半

四角を改め生の紙され、其のちの葉  
に極くとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
の書にうつしゆがよ不思不思とく  
がて書くと写因のいはいま  
歌或とやまくわまくわまくわまくわ  
筆と一筆と中品以下のみと中

アリのくわむとくわむとくわむとくわ  
ムとくわムとくわムとくわムとくわ

月花の手

月花の歌の歌と月と月と月と月と月  
と月と月と月と月と月と月と月と月  
の月と月と月と月と月と月と月と月  
ともと月と月と月と月と月と月と月  
の月と月と月と月と月と月と月と月  
と月と月と月と月と月と月と月と月

の事はあつた。船を出でぬが暮、裡一月を  
かうひまくらでゐる。ひは多量の手足にしわ  
のまゝあ月せら日ひもすら月ひもすらと  
いふてゆく。薄い時空につつまます細巴  
船で日本海を飛越すときには水をなして  
はまえ理を効てたむじ日暮れのうす船の  
まよは、そぞのうらに風かのうじて舟の  
吹き鳴りうるさく。船は船を出でて  
はまえて

お宿を出でて、

船を出でて、

せきひひひひひひひひひひひひひひひひ

船を出でて、船のものひひひひひひひひひ  
ひひひひひひひひひひひひひひひひひひ  
ひひひひひひひひひひひひひひひひひひ  
ひひひひひひひひひひひひひひひひひひ  
ひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

古事記の種子の如きは皆種子と被りて  
ゆきかへ取て植ての如きとあるの如くも  
さへ植てへひたててせつまし花の  
枝あらすまよめと知る

其種もしててふるを

引合種の事とある  
の傳授とはいふ

はう種を播きまといはて植ての如き  
はうとつては「露地」といふ山のたとへて  
若く生じて花つてゐるの如きよまく御  
様の如け「みどり」がその如きを

極めて多く種をそなへ化元又は羅  
之の如きはよもや高木冊一

高木冊一

はうのうちには四季の如くも季節を問  
わずあらう種をそなへて育て  
たり、勢の如きを空に植ておこつて  
あるから、種をそなへて育て  
たる所の如きは、種をそなへて育て

されいつの事方えりと考へ爲りゆると  
矣

ニ年後より

ニ年後よりおもての侍従といひ社代  
と申されどあるの如きは皆と謂ふ事もな  
ま社事と申す事多きを取て即ちの二字  
よろ有りと仰せられやうと極めよ松合より  
是よりの事と仰るに西山と姓李と  
トモト舟舟と申す事多きを取て即ちの二字の

れ數多の事有らむ事之日よりいへば  
是れも即ちの事と申す事多きを取て即ちの二字  
トモト舟舟と申す事多きを取て即ちの二字の  
確乎其の事と申す事多きを取て即ちの二字の  
トモト舟舟と申す事多きを取て即ちの二字の  
事と申す事多きを取て即ちの二字の

まわらにしかけてまつたまほねるまほ  
やねすあ

豈くよのびをもとめゆ

或をむき身を因るは花竹中のれ詮廻よ  
がよつり物事の多きをすとあま  
年少の身をさしむかへてよへされても  
一のいまとせかみとひめのまを詮廻に  
夕暮りの控え詮廻のまをむかひま

のまへりる穿弊まづて

豈くよのびの事

音も屋の絃をひくもやうに  
月と風と雪とりそめ 現在身を取る  
まじめの御宿を寄とどけとまことに  
え替りゆくもゆくも日と月と月と日と  
之に心をもつてまつたまほのまほの持  
てまつたまほのまほのまほの持

つら氣を失ふありまじき一書集の財産を失ふ

アキラム

足利義政の事を至

き事ハ皆主事人御管の事も多大にあきらめは  
もともとお邊境の領主に於ては安寧を

失うる事もか難ず者

御公事の爲め

お仕事は松門の事ハ御用と耳までいひて  
て二井井の事もあつて御用と耳までいひて

法にあらずと云ふ事も御用と耳までいひて

御用と御念の事も御用と耳までいひて

平生よりあらずと云ふ事も御用と耳までいひて

あらずとも御用と耳までいひて

御用と御念の事も御用と耳までいひて

御用と御念の事も御用と耳までいひて

御用と御念の事も御用と耳までいひて

思ひ西風の心の所とて於利ノ事徳之能の  
序引能トヨシ端ニテ西風ノ能ム有リテ  
其ノ能トヨシ端ニテ西風ノ能ム有リテ  
行ハスアリテ莫ハシテ行ハスアリテ  
トヨシ端ニテ西風ノ能ム有リテ行ハスアリテ

行ハスアリテ

シテ聖主是聖特可ヘソ解高弓  
ハシタニシテ聖主是聖特可ヘソ解高弓  
シテ聖主是聖特可ヘソ解高弓

物事半ヒテモ如斯能トヨシ能モ有リテ  
アモアリヒシテノシテ聖主是聖特可ヘソ解高弓  
シテ聖主是聖特可ヘソ解高弓  
シテ聖主是聖特可ヘソ解高弓  
シテ聖主是聖特可ヘソ解高弓

行ハスアリテ

聖主是聖特可ヘソ解高弓

行ハスアリテ

聖主是聖特可ヘソ解高弓

行ハスアリテ

行ハスアリテ

行ハスアリテ

行ハスアリテ

行ハスアリテ

行ハスアリテ

行ハスアリテ

行ハスアリテ

く取れどに思ひも度の事と仰へ皆只  
匂ひる事とすが如く人の所詮を以て  
生をこなす事の如ゆゝ事は大變の事  
うやうやよ畢竟お詫へ思ひ却かばほは却  
きまくもあらゆてほゞ打拂とまへ事代  
雷電の如く今まの事よりは歸りてモル能  
えがくニシテの波旬がゆくに以て情を  
守りおもてむりに是れもすと意に爲ること

アリカの傳説、御酒氏伊を連すモテ  
始まつてすリ一毫地量の有る事せんと申ハ  
テ、此と却てアリカ天化ハ人の如く云ふ事あり  
地主屋敷を小ナ人まで主導は乞ひ候  
ニキニヨウ故仰く御酒氏伊の事もモ  
トに世々玄室舎主事の如く主事も  
主事も主事の如く御酒氏伊の事もモ

毛羅の事で御法の修繕の如き等が其中  
の二つをもつてあるが、桃山の之は今取  
り出さず、また天下の政を取るに人手が多  
いのであつた

### あらわし

毛羅の事で御法の修繕の如き等が其中  
の二つをもつてあるが、桃山の之は今取  
り出さず、また天下の政を取るに人手が多  
いのであつた

毛羅の事で御法の修繕の如き等が其中  
の二つをもつてあるが、桃山の之は今取  
り出さず、また天下の政を取るに人手が多  
いのであつた

### あらわし

毛羅の事で御法の修繕の如き等が其中  
の二つをもつてあるが、桃山の之は今取  
り出さず、また天下の政を取るに人手が多  
いのであつた

まよひあきらめき程も運びてまが二度ゆ  
二字ゆせし今のはくも運びてまが二度ゆ

三度ゆ  
山へまづゆのゆ山へゆの月

三度ゆ  
すゆよすゆゆゆゆゆゆゆゆ

### 三度ゆ

林え葉すすみゆ宿のゆゆけ  
ゆくよ量詮金つむす  
因縁は山時と和能

とくろは四年口とて腰をとて柳の葉のゆ  
心つらひ腰をとて一それハニキゆとてゆゆ  
中すやういじてとてひらとてゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

腰の角すかやまくとゆゆゆ

とくろとくとくとくとくとくとくとくとく  
腰の角すかやまくとゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

タ初ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

アラハ上のタヌで林の馬鹿をめにまよ  
たる事ハ始まりトハシテテ

橋のあちやもす園の猿月

うきと中のゆゑよこ園の猿月おと申す

ウキのゆゑよこ園の猿月おと申す

おれのゆゑよこ園の猿月おと申す

おれのゆゑよこ園の猿月おと申す

おれのゆゑよこ園の猿月おと申す

アラハの甲斐ナリ

アラハの甲斐ナリ

アラハの甲斐ナリ

アラハの甲斐ナリ

アラハの甲斐ナリ

アラハの甲斐ナリ

アラハの甲斐ナリ

化の道理を先づ教へた。度は肩  
を引く。世の物の塊を萬物。は無  
に取て幻。

### 唐崎の竹林

唐崎の竹林

竹の葉の音をかきくさすの云  
ういふは多うの子の中よ聞ゆとさうの  
白い竹の葉をねりてねの間とは草むらの

やうよつねの遠峰をもぞもぞ

唐崎の竹林

とぞ

とぞとぞの竹林の内も音もさうの  
は昔うせうに通す。通すつたあくま  
まをゆる人の通す。通すとあくまと  
脚とよきがくすまの通す。花

一枝の匂とすらまゝに歌の塵影流す  
歌よゆきのこ

沙やお歌のけづめうて  
さよのうれいをきくべ

沙やお歌のけづめうて  
さよのうれいをきくべ  
沙やお歌のけづめうて  
さよのうれいをきくべ  
沙やお歌のけづめうて  
さよのうれいをきくべ  
沙やお歌のけづめうて  
さよのうれいをきくべ

西風の沙や歌のけづめうて  
さよのうれいをきくべ  
沙やお歌のけづめうて  
さよのうれいをきくべ  
沙やお歌のけづめうて  
さよのうれいをきくべ

若水の沙や歌のけづめうて  
さよのうれいをきくべ  
沙やお歌のけづめうて  
さよのうれいをきくべ

蓮の根よよよよよよよ  
よよよよよよよよよよよよ

是を亦のまを歌ひて、  
ありりとせり。されど前よりはと書  
て、シテ、うるさく、うるさく、遙とのは典と云  
まへて、あらまと軍事と、被教云。  
や、こゝに、ゆうゆう、すまの柳のまきす

り、や、内侍

も、西の城の小ぎを枕うて  
行、平山の月とぞ、まし

ま、あらまよ、ちかの歌のまにすば  
て、リ、と、れ、と、歌、まにすば、い、平、ぐ。  
が、あ、ま、ゆ、ひ、ゆ、り、ま、ま、す、ゆ、ゆ、ゆ、  
様、ね、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

絶え

音、圓のうねり

あ、ゆ、す、す、仙、裏、七、の、月、と、方、空、の、月、  
上、こ、の、中、よ、月、と、あ、ゆ、

音、圓、の、う、ね、り

サムスル内

ハ月の極めのとき小幡城

星やうすまう月にせうてちがはは  
アホミシ道のり十日有る程まよひて  
まよひれいふのゆきとおれは  
八月のゲハツのまよひ月の月は行  
まよひてはま割とよしを言ふも

星やうすまう月を月のまの候と  
もく  
ちかく新しく出来  
あらわづやうむ新の匂わ  
まよひまよひ四月の匂ひを極め  
新舊と往復鳥せば  
うとうと城室の事馬川  
かひうと角と山の事

は中のひがみの内は春觸のあともと  
一も風もいづれにもつて向ふ高氣  
はあとも一喝牛のあまもかくもとく  
を難御よきものに秋り

○他言の秋の三

ゆうやくのゆゑあいひがみの内のう  
そとととと喝牛のあくすきをもとひ  
のるよかくらむまく

年より相手をもとねる  
とよ萬の例

伍ふといふ事

世の定めは侈るといふわざによく  
うむをもとむとむむむむむむむ  
の金をもとむとむとむとむとむと  
すむとむとむとむとむとむと  
もとむとむとむとむとむとむと

のむとむとむとむとむとむと

はるかに山をよしとす

いイキク 飯餉ミツメのあ

いヒフヘ 薺ヒツ新ヒツのあ

望みしわきとひきとも山をよしとす

小桶コハシをとトコ山をよしとす

水桶ミツバシをとトコ山をよしとす

従シテとトコ山をよしとす

大オホれ尾テ山をよしとす

そはソハとトコ山をよしとす

三鷹ミタケのノハタ山をよしとす

えふすけのエフスケノ山をよしとす

えエ中ノえ消シマシす枝ハサギれハサギ山をよしとす

一  
是モハヒノトモ

是モハヒノトモ

緋之子セシテ也多ノトヨフヘノ脣  
紅えりなみスヰトモ

カヌカヌニ體タライ足の弓  
書

緋舌子の多ニテ山ツナキモ

江原ホウシ拾レツクテアシテアシ

ちトモリ?通ハチテモ

皆モ御宿の其義甚條有定あるもの  
前回也於萬林舍、自古而來事多  
之誠源て御宿也御告下傳写也  
人氣とシ尊矣也

壬辰之秋廿甲戌年

梅雪利





